海外養殖魚研究会報

発行：海外養殖魚研究会　　No.6 July 1979

第6回海外養殖魚研究会が6月16日(14:00～17:00)(株)OAFIC会議室で開かれました。出席者は下記の通りでした。

加福竹一郎
池ノ上　宏　　(株)国際水産技術開発
田中　秀幸　　同　上
横川　次寛　　海外漁業協力財団
森元　直樹　　JICA専門家
秋山　敏男　　農林水産省増養殖研究所
歳原　隆文　　JOCV元隊員　　(西サモア、レポーター)
高橋　満之　　JICA　国際水産研修センター
座間　彰　　JICA　水産技術協力室
座間味　勇　　(株)国際水産技術開発

〔議題〕

(1)　西サモアにおける水産業

(1) 西サモアにおける水産業

西サモアに1977年から1979年まで 青年海外協力隊員として派遣されていた 歳原さんに 西サモアにおける水産業の現状、仕事の内容について 話していただきました。

西サモアの概要

西サモアは 首都アピアのあるウポル島と サバイ島からなっており、総面積は 日本の佐賀県程度である。人口は 約15万人で このうち4万人が アピアに集中している。タロイモ、ココナツ、ココア等の農産物の多くは サバイ島で生産されている。ココナツ、ココアは この国の数少ない 外貨源であるにもかかわらず、サバイ島と行政機能の集中しているウポル島の間には 経済的格差があり、サバイ島住民は不満を抱いている。経済は ドイツ系、中国系の資本におさえられている。製造業としては 石けん、ビールぐらいしかない。輸入額は 1975年に 110億円で食糧の占める割合が大きい。

西サモアの水産事情

Local fishery は 一本釣、曳縄、定置網、魚を追いたてモリで突く漁法 等が行われており、網漁法は一切ない。住民は ハタ、フエフキダイ、ヨコフエダイ、ハチジョウアカムツ、ヒラアジ、シイラ、ボラ等

の魚を好む。カツオ，マグロ等は漁獲量では上位に位置するが、住民の好みとしては下位に位置づけられている。かつては専業漁師と呼ばれるものはおらず、住民は魚の欲しい時海に出かけるという状態であったが、最近育成により漁業を専業とする者が出てきている。総漁獲量は850t/年（政府発表1600t/年）であろう。

水産物として冷凍魚をニュージーランド，日本から，缶詰を日本から輸入しており、その額は1975年に5億円であった。住民は平均して週1回程度魚を食べる．料理法は一尾を丸ごと蒸焼きにするウム料理と呼ばれるものである。塩干品，練製品を食する習慣はない。水産加工品とよべるものは、まだないが、輸出用として、干ナマコは有望かもしれない。魚以外に2枚貝の1種が食用になっている。

周辺の海の資源量は少ないと考えられるが、漁業の振興、未利用資源の有効利用を進めることによって、現在輸入している水産物の代替，輸出商品の生産を行なうことができるだろう。そして、その線に沿って外国からの援助が行われている。まずFAOが1973年から行っている援助ではライ病患者を舟大工として訓練するなどして、Local fisheryの全体のレベルをあげるのに役立っている。またUNDPはメキシカン・モーリーを養殖し、これをカツオ漁の生餌とする試験を1978年11月から実施し好結果を得ている。日本からは無償援助でカツオ練習船，冷凍車の供与，冷凍庫・水産センターの建設が行われ加工と増養

殖が行われることになっている。かつて日本から3億円のマグロ缶詰の無償供与がなされたが、このような援助の効果はおおいに疑問である。

レポーター自身協力隊員として水産加工の指導を行うことになっていたが、流通機構が全く未整備なため、その整備に多大なエネルギーを傾注した。加工品としていろいろなものを試作したがサツマ揚げが最も好評であった。

養殖の対象になり得るものとしてはオミテナガエビ，ナマコ，スポンジ，ウミガメ，メキシカンモーリー，サバヒー等が考えられるが、魚は需要を満たす分だけ充分漁獲できると思われているので、食糧源としての養殖よりカツオ漁の生き餌の養殖，輸出商品の養殖が有望とであろう。

〔追記〕

1978年8月よりFAOの専門家Dr. Dan Popperがサモアで増養業をスタートさせました。彼の手紙によりますとウシエビ（Penaeus monodon）の養殖は順調で5週間で7～4cmに成長し、一方giant malaysian prawnの養殖の結果はおもわしくないそうです。

（塩原）